

リサーチ・クエスチョンを見つける

遠藤 公嗣

(明治大学大学院経営学研究科教授)



明治大学の大学院経営学研究科マネジメント・コースの学生は、修士論文を執筆して大学に提出し、審査に合格して、修士の学位を取得することが期待されています。ところが、執筆するはずの修士論文とは何か、いいかえると研究とは何か、を理解しないまま入学してくる学生は、珍しくありません。これを説明しておきたいと思います。

研究とは、端的にいうと、新しい知見を獲得する行為であり、修士論文を含む学術論文とは、獲得した新しい知見の内容と意義を、読者に説得するための文のことです。研究は、勉強とは違います。ここでいう勉強とは、既存の知見を獲得する行為です。平たくいえば、教科書や学術論文などを読んで、その内容を理解するということです。この行為が研究にとって重要なことは、もちろんです。そもそも、既存の知見は何かを知らなければ、新しい知見かどうかを判別できないともいえます。しかし勉強は、研究ではありません。どんなに勉強しても、既存の知見のみを獲得しているだけで、それが貯まるだけからです。したがって、勉強して獲得した既存の知見をまとめた文は、修士論文ではありません。

「リサーチ・クエスチョン」とは、新しい知見を獲得するための研究課題のことです。ほぼ全部の研究分野で、通常は、「リサーチ・クエスチョン」が修士論文のテーマになります。経営学を含む社会科学の分野では、「リサーチ・クエスチョン」を立てること自体が、通常、研究プロセス上の非常に重要で大きな作業となります。

「リサーチ・クエスチョン」は、どのようにして見つけるのでしょうか。既存の知見を獲得するという勉強は、見つけるために必要です。しかし、意外に聞こえるかもしれませんが、それだけで見つけることは容易でなく、さらに、「スジの良い」ものを見つけたことは、ほぼ不可能です。私は、抽象的にしか述べられませんが、以下のプロセスが必要と思

います。まず、大脳への知的な刺激があること、その結果として、大脳の中で、これまで無関係であった情報Aと情報Bと情報Cが結びつくこと、その結果として、解明すべき未知の世界の方向がわかりそうなこと、これらです。

こうしたプロセスの発生に最適なものの一つは、対面の演習形式での、学生間の議論です。学生甲が、学術研究に関連するトピックについて、何かの質問やコメントを発し、それを受けて、学生乙が、回答やリプライを「瞬間的に」考えて発します。「瞬間的に」が重要だと、私は考えています。それを受けて、学生甲も、そして第3の学生丙も、同じことをします。これら全体が、議論に参加する学生への大きな知的刺激になり、各自の「リサーチ・クエスチョン」を育てます。

大学院に入学するとは、この議論に参加する権利を得ることです。大学院こそが、この議論の場をもっとも提供できます。この議論の場に恒常的に参加することによって、学生は「リサーチ・クエスチョン」を見つけやすくなります。修士論文に到達しやすくなります。

社労士の皆さんは、これらを理解した上で、大学院への入学を考慮していただきたいと思います。そうすると、入学後に、修士論文への到達が、より容易になるだろうと私は確信しています。

Profile 1950年生まれ。東京大学経済学部卒業。経済学博士(東京大学)。専門は、雇用関係の全般。近著に、単著『これからの賃金』(旬報社、2014)、編著『同一価値労働同一賃金をめざす職務評価』(旬報社、2013)、共著『仕事と暮らしを取りもどす―社会正義のアメリカー』(岩波書店、2012)、編著『個人加盟ユニオンと労働NPO』(ミネルヴァ書房、2012)、共著『労働、社会保障政策の転換を―反貧困への提言―』(岩波書店、2009)。